

高岡地域の文化遺産 (高岡地域自治区管内)

【地域の歴史と特色】

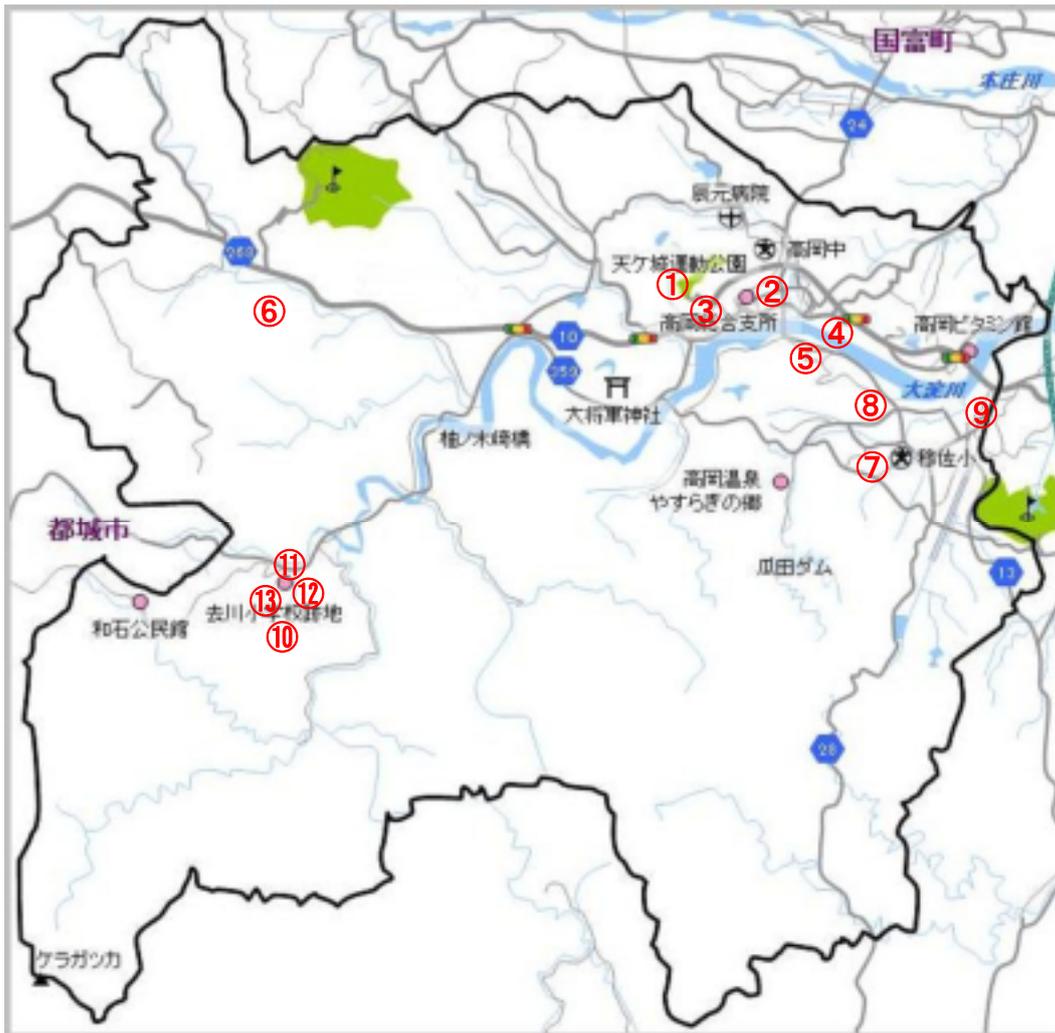
高岡地域は、中世は島津荘の一部である穆佐院の中心として、近世は薩摩藩の麓武家集落として栄え、豊かな自然のもと様々な歴史と自然の文化遺産が生み出されました。

高岡は、慶長5年(1600)に、関ヶ原の戦いの帰途にあった島津義弘によって創設された外城の一つで、この時以来、天ヶ城の麓に武家集落が形成されました。

一方、穆佐は、穆佐院政所が置かれ、近辺の政治・経済の拠点となった地域で、南北朝の争乱や島津氏と伊東氏の争いなど、穆佐城を中心として数多の戦乱に巻き込まれました。江戸時代には、薩摩藩の外城の一つとして栄え、現在も武家屋敷の面影が残っています。

去川には、薩摩藩の街道の要衝として関所(境目番所)が設けられ、関跡やその御定番を勤めた二見家の住宅など、多くの文化遺産が残されています。

【文化遺産マップ】



高岡地区

あまがじょうあと

① 天ヶ城跡（市史跡）

慶長5年（1600）、関ヶ原の戦いからの帰途にあった島津義弘は、稲津勢が三名（現国富町）あたりを放火してまわるのを目の当たりにし、高岡の地を藩境の重要拠点と考え、天ヶ城を築き、外城を高岡と命名しました。このとき、藩内から700余家が移住し、天ヶ城の曲輪に屋敷を構えた武士もいましたが、同7年には城内を引き取り、麓に武家集落が形成されました。

城域は約6haで、標高120m以上の丘陵に14ヶ所以上の曲輪が設けられています。平成3年6月から翌年10月まで行われた発掘調査では、17世紀初頭の掘立建物跡や溝状遺構など、島津義弘が築城したとされる頃の遺構や遺物が出土しました。



たかおかふもとぶけやしきぐん

② 高岡麓武家屋敷群

たかおかふもとぶけじゅうたく（もとよしけ）

📷 高岡麓武家住宅（本吉家）

この建物は、井上地区にあった「本吉家」の住宅を保存のために移築したものです。19世紀中頃に建てられた住宅で、中廊下をはさんで鍵手に「接客部」と「居住部」に分かれるなど、薩摩藩の武家住宅に見られる二棟造りの形式をよく残しています。敷地の南側には同じく「本吉家」から移築した武家門、東側には従来からある「吉富家」の武家門が残されています。

【公開日】

毎週土、日、祝日

かわかみけぶけもん

📷 河上家武家門（市有形文化財）

高岡麓に残る武家門の1つです。棟札に正徳元年（1711）とあることから、今から約300年前に建てられたことが分かります。後方に控柱を付した腕木門で、薩摩藩の武家門の特徴を色濃く残しています。扉は観音開きで、一説には80石以上の武家だけに許されたと言われていています。

河上家の禄高は200石程で、郷士年寄役や弓術の指南家を勤めるなど、高岡郷では上級武士でした。



あんどうけぶけもんといしがき

📷 安藤家武家門と石垣（市有形文化財）

河上家武家門と同様に、後方に控柱を付した腕木門として、薩摩藩武家住宅の特徴をよく残しています。安政4年（1857）の大火で焼失し、まもなく再建されたと伝えられています。

本来、高岡郷の武家屋敷の垣は、竹の生垣を横2段の割竹で固定したものでしたが、幕末になって石垣が許可されると、次第に竹の生垣は石垣へと変わっていきました。

安藤家は、安永8年（1779）の「高岡衆中高帳」（市指定有形文化財）によれば、禄高93石程で、高岡郷では上級武士でした。人々からは「あんづどん」と呼ばれ、分限者として知られていました。



いちきけながやもん

📷 市来家長屋門（市有形文化財）

長屋門は、門の出入口の両側または片側に部屋が設けられている門で、高岡麓では市来家長屋門が現存する唯一のものです。門と長屋が棟の高さを異にしているところに特徴があり、長屋門の初期的な形態をよく留めています。

市来家は、安永8年（1777）の「高岡衆中高帳」によれば、禄高300石程で、記載されている衆中の中で最も高い禄高を所持しています。江戸後期に直心影流の剣術師範を勤めていたため、この門も人々から「道場門」と呼ばれていました。



りゅうふくじあと

③ 龍福寺跡

龍福寺は、「高岳山龍福寺」と称し、慶長5年（1600）に高岡郷の菩提寺として創建されました。鹿児島福昌寺（曹洞宗）の末寺で、一説には、島津義久の号「龍伯」の一字「龍」をとって寺号としたと伝えられています。現在の龍福寺墓園が境内跡で、明治初年の廃仏廃釈により廃寺となりました。

寺跡に残る仁王尊は、江戸時代の高岡の豪商、横山勘兵衛が寄進したものと言われ、廃仏棄釈により首、手を折られましたが、幸いなことに篤志家によって修復され、現在に残されています。口を開いた像を「金剛」、口を閉じた像を「力士」と呼びます。



龍福寺仁王尊(市指定史跡) ➡

あわのじんじゃ

④ 栗野神社

祭神は、大己貴尊（大国主命の別名）他7神で、江戸時代には栗野八社大明神と称しました。勧請の年代はつまびらかではありませんが、応永年間（1394-1428）には、穆佐に在城していた島津久豊が崇拝し、穆佐院300町の惣廟として神領7町を寄進しました。

江戸時代には、高岡郷惣廟として島津氏の庇護を受け、神領18石余が与えられました。現在の社殿は、嘉永5年（1852）に再建されたもので、銅板葺き入母屋造の本殿に、棧瓦葺き入母屋造の舞殿・拝殿が残されています。

旧暦6月27日の祭礼には、御輿を船に乗せ、宮崎の上野町まで浜下りの御神幸がなされたといわれ、10月の祭礼では、流鏝馬の神事も行われていました。



大正時代の祭礼の様子(流鏝馬神事) ➡

げっちばい

⑤ 月知梅（国天然記念物）

月知梅は、もとは香積寺（曹洞宗龍福寺末）の客殿の庭にあった梅で、延宝元年（1673）に島津氏19代当主・島津光久が上洛の途上立ち寄った際、月知梅と命名したのがその由来と云われています。安永-天明年間（1772-89）までは1株でしたが、枝が垂れ、地について株をふやし、現在では70株ほどになっています。枝が地を這う姿から臥竜梅とよばれ、その有様は「群竜の翻るが如し」として囃されました。

月知梅を訪れた文人墨客に、高山彦九郎、安井滄洲がおり、日記や漢詩に梅の様子を記しています。

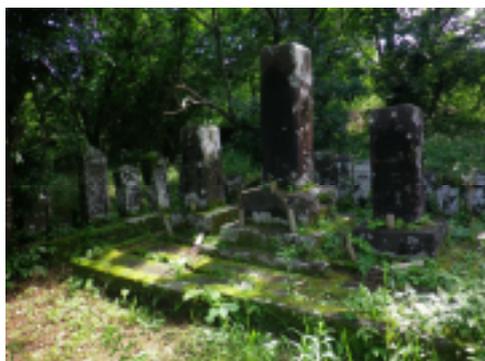


ほんえいじあと

⑥ 本永寺跡

本永寺は、幕末まで浦之名村深水にあり、日蓮宗富士門流の学頭職の寺として栄えました。日向出身の日要上人（1436-1514）が師の日朝上人（?-1498）を開山として招いたのがはじまりで、その後、本山安房妙本寺中興の祖日我上人（1508-87）を輩出するなど、中世には流派の経営に大きな影響力を持ち続けました。

現在、深水にある寺跡には、近世のものと考えられる石塔類が数多く残され、往時の繁栄の様子をうかがい知ることができます。



穆佐地区

むかさじょうあと

⑦ 穆佐城跡（国史跡）

穆佐城が初めて文献史料にあらわれるのは、南北朝期の建武2年（1335）で、足利尊氏の所領であった穆佐城に南朝方の伊東祐広が攻め寄せたと記されています。その後も穆佐城は宮崎平野の北朝方の拠点であったため、たびたび争奪戦が繰り返されました。

15世紀初め、島津氏が宮崎平野に進出すると、穆佐城には当主元久の弟久豊（8代当主）が入城し、半世紀にわたって伊東氏との間で争いが繰り返されました。

文安2年（1445）、穆佐城は、土持氏とともに侵攻した伊東祐堯によって陥落し、以後130年間、穆佐城は伊東氏の支配となりました。

天正5年（1577）、伊東氏の豊後落ちにより、穆佐城は再び島津氏の支配するところとなり、慶長5年（1600）には、伊東方の稲津勢が穆佐に攻め入り、城の木戸一重を打ち破るなど、穆佐城は江戸時代の初めまで戦乱の舞台となりました。



しまづただくにのたんじょうすぎ

📷 島津忠国の誕生杉（市天然記念物）

第9代当主島津忠国の誕生を記念して植えられた杉で、「御誕生杉」または「御年比較の杉」とも呼ばれています（杉がある場所は「坪の城」と呼ばれ、忠国が誕生した曲輪と伝えられています）。

『三国名勝図会』には、「周囲は三丈余（約9m余）、2株の間は約3尺（約1m）隔たり、根や幹、枝が巨大に繁茂し、枝が垂れて地につき、そこから根が生じ、2株といえども数株あるかのような様子となっている。高く聳えること数十丈（1丈が約3.78m）、横に繁茂すること1反ばかりの状態で見ると人すべてが聞かずして神木であることを知る」と記されています。

初代の杉は明治7年（1874）に焼失しました。現在は、明治20年頃に地元の篤志家によって植えられた杉が残されています。



たかきかねひろせいたんち
📷 高木兼寛生誕地（市史跡）

高木兼寛（1849-1920）は、当時難病といわれた
かっけ病の予防法をはじめ、日本医学界に多大な
貢献をした人物です。兼寛は、東京慈恵医科大学
や日本初の看護学校を創設するとともに、宮崎神
宮の大造営など多くの偉業を成し遂げました。

この生誕地は、昭和61年9月に記念公園として完
成しました。土地（762㎡）、記念碑、庭園樹木一
式は、平成2年の高木兼寛先生銅像除幕式の日
に、学校法人慈恵大学から高岡町へ寄贈された
ものです。



ごしょうじあと
⑧ 悟性寺跡

しまづひさとよのはか
📷 島津久豊の墓（市史跡）

悟性寺跡には、第8代当主島津久豊の墓が残り
ています。久豊は、応永10年（1403）に穆佐城に
入り、伊東氏の加江田城を攻め、池尻城・白糸
城・細江城を築きました。その後、伊東氏に穆佐
城を奪われますが、応永31年（1424）に再び伊東
氏を攻め、穆佐城など大淀川以南の地を手に入れ
ましたが、翌32年、久豊は51歳で逝去しました。

江戸時代、悟性寺の久豊の墓については、藩と
寺の間で一騒動あったようで、藩は悟性寺に墓が
あることを容易に認めようとはしませんでした。
ようやく藩が認めたのは幕末のことで、現在の墓
は、この時に建てられました。



しもくらあわのじんじゃ
⑨ 下倉栗野神社

下倉栗野神社は、天明2年（1782）に高浜栗野神
社から遷宮されました。

元々、高浜栗野神社の祭礼で催される流鏝馬神
事では、穆佐小山田組の神馬が先頭に立ち、鏝矢
を射るしきたりが厳守されていました。ところが、
天明元年の祭礼で、高岡飯田組が多勢に物を
言わせて神馬を先頭に立てたところ、怒った小山
田組の射手が飯田組の射手を射、双方の若者の間
で乱闘騒ぎになりました。これがきっかけとなり、
下倉栗野神社が新たに造営されたと言われて
います。

現在の拝殿・舞殿・本殿は、嘉永5年（1852）に
建てられたもので、本殿の両脇柱と虹梁には、龍
と瑞雲を造り出し、中央に島津家の家紋をつける
という賑やかな趣を見せています。



去川地区

さるかわのいちょう

⑩ 去川のイチョウ（国天然記念物）

このイチョウは雌株で、一説には島津氏初代忠久（1179-1227）がこの地に植えたとされ、樹齢800年とも伝えられています。

幹の周囲（胸高）約10m、高さ41m、枝張りは東に約6m、西に約7m、南に約9m、北に約15mあります。平成5年9月3日の台風13号の襲来により、太枝の大部分が折れるという被害に遭いましたが、翌年に樹木蘇生治療を行い、現在は樹勢を回復しています。



さるかわのせきあと

⑪ 去川の関跡（県史跡）

薩摩藩は、藩境防備のため、「境目番所」と呼ばれる9つの関所を設けました。去川の関もその一つで、正式には「去川御番所」と呼ばれていました。当時、この2つの関所の外側に位置する高岡・穆佐・綾・倉岡の4ヶ郷を「関外四ヶ郷」、関所より内側を「内場」と呼び、双方の行き来にも通行手形を必要としました。当時から通行人の取締りが厳しい関所として知られ、「薩摩去川の御番所がなけりゃ 連れて行くもの身どもが郷に」と地元の俗謡にも謡われています。



ふたみけぼせきぐん

⑫ 二見家墓石群（市史跡）

二見家は、初代二見石見守久信以来、11代にいたるまで去川の関の御定番を勤めました。ここには、4代以降、歴代の墓石群が残されています。



⑬ 旧二見家住宅（県有形文化財）

二見家は、去川の関の御定番を勤めた家です。関所が設置された天正年間（1573-92）以降、代々この地に居住してきました。二見家住宅の建築様式には、「二棟造り（分棟型）」と呼ばれる南九州の民家の特徴が取り入れられています。右側の棟は「座敷棟（オモテ）」と呼ばれ、来客を迎える接客空間として利用され、左側の棟は「居室棟（ナカエ）」と呼ばれ、二見家の私的な空間として利用されました。

二見家住宅は、同家に残された古文書には「去川御仮屋」と記されています。「御仮屋」とは、薩摩藩では地頭や領主の詰所のことを言い、同様に二見家住宅が公的な「役所」として位置づけられていたことがうかがえます。藩主など、薩摩街道を通行する上級身分の者が宿泊・休憩する建物としても使用され、嘉永6年（1853）には藩主島津斉彬、明治4年（1871）には勅使岩倉具視がこの建物に立ち寄りしました。

建築の時期は、「平成の大改修」の調査、及び二見家文書の記述によって「座敷棟（オモテ）」が安政2年（1855）、「居室棟（ナカエ）」が明治28年（1895）ということがわかりました。



解体工事で現われた小屋裏 ▶▶